

## 一 思 親 閣

つらつら高祖日蓮大聖人様の御一代の御化導の次第を案じたてまつるに、主師親の三徳を光顯して、近くは人天有漏の世間に倫道を示し、遠くは極果無漏の聖境に信敬帰依の宗旨を説かせ給う。

国主の恩を報ぜんがために、立正安国論を作つて諫言の鼓を撃ち、師匠の恩を報ぜんがために報恩鈔を作つて菩提の追善を営み、父母の恩を報ぜんがために、身延山頂九ヶ年の問望郷の涙を瀧がせ給いぬ。

伊豆の伊東の三ヶ年の御流罪に、たとえ涙無き人も、東条の松原の刀杖の御法難に、たとえ涙無き人も、相模の国片瀬竜の口の頸の座に、たとえ涙無き人も、佐渡ヶ島の塚原三昧堂の四ヶ年の御艱難に、たとえ涙無き人も、しかも御歳六十を越えさせ給うまで、父母の墓を拜まんとて五十町の嶮峻を攀じさせ給える、御孝養の御心情を拝したてまつる時何人か誰か涙無きことを得ん。

竜の口の途すがら「日蓮貧道の身と生れて、父母の孝養心に足らず」と、末後の一句に平生堪えたる万斛の憾みを述べ給う。塚原の雪の中にも「今一度、父母の墓を見る身ともなりなん」と、思いを焦させ給いけり。されば身延の御山にしては、「東の方とし云えば、吹く風にも庭に降り立ちて肌えに触れて懐いを慰む。」とぞ仰せられける。嬰兒の乳を慕う心、そのままにして父母を慕い、御墓を慕い、み空のあなたを慕わせ給いぬ。天然の真情、仏法の根源、後人扁して「思親閣」と称す。けだし高祖日蓮大聖人の面目にして、また法華經の肝心なるべし。

海外伝導の御暇乞いを兼ねて、悲母行阿院日蘇大法尼の御遺骨を負うて身延に詣うでぬ。武井坊の小松海浄師、清水坊の内野日運師、従来憐愍せさせ給えるが、さすがに遷化の後間も無き悲母の遺骨を内地に藏めて、孤影万里の波濤を渡り、妙法蓮華經の五字七字を弘めんがために、赤脚死地に就く身の心中を不便と思ひやらせ給いて、悲母の遺骨を分かつて、身延山頂思親閣の大広庭に起塔供養せしめ給いぬ。

高祖日蓮大聖人様の御慈悲の不思議によるにあらずんば、いかでかかくのごとき冥加を被らん。女人成仏の方便このほかにあるべからず。高祖大聖人の大孝養の余徳を被むつて、わが身も一分の孝養の功徳を得たり。高祖大士、父母の御墓を慕わせ給ひし思親閣の霊地、わがためにも母の御墓を慕う思親閣の霊地となりぬ。思親閣の三字、凡聖を通じて重々に菩提の大道を開きぬ。

海外伝導の御暇に、去る三月十四日一たび身延の山に参りぬ。次いで七月五日二たび身延の山に参りぬ。来る八月二十五日三たび身延山に参りて、悲母の遺骨を高祖日蓮大聖人の御手に託して、心残りなく身延山を起点として、いよいよ海外伝導の旅に立つべくなりぬ。尽きぬ名残りなれど、仏法のために今度いかなることにもわかれぬべし。力量無き身の大願、不便と思ひ召して成就することを得せしめ給え。

日本の仏法、西天印度に還るべき瑞相に魁けせんと欲す。東方亜細亜の精神文明復興に、六十二見の諸党を摧破せんと欲す。殺人文明の欧米阿修羅の闘諍堅固の迷乱の獄より、一切衆生を平等に勉出せしめんと欲す。二陣三陣、毒鼓を雪嶺の頂きに撃ち、法雨を恒河の流れに注がん。

もし西天にこの法還らずば、高祖の予言地に墜ちなん。

もし西天にこの法還らずば、われらが菩薩行立つべからず。

もし西天にこの法還らずば、娑婆の衆生は永く火刀血の牢舎を出ずる期あるべからず。

されば諸天善神王、忝くも高祖大士の本懐を援けて、われらが修行を衛らせ給え。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

昭和五年 太才庚午 七月二十五日

行 勝 敬白

## 二 身延山にお訣れ申し上げて

八月二十五日

嗚呼、此の八月二十五日こそ、一つには悲母行阿院日蘇大法尼様追孝の一念を、南無妙法蓮華經の御題目の七字に写し、忝くも高祖日蓮大聖人様が九ヶ年の風雨、五十丁の嶮難を踰つて、遙か房州の方、東の天を拝ませ給ひ、御両親の御墓に御回向遊ばされたる孝養の鑑の御山、身延山の頂上奥の院、その名も尊とき思親閣の御霊地の一隅、牛が頸の祖師堂、蓮華房跡と申す所に、表裏二面の石の卒塔婆を建立し、高く六欲天の表に願わして、遠く万年の後かけて、御山の御威徳輝やくきわみ、絶えぬ御法の山風に、悲母の増円妙道、報地莊嚴の、華香の資糧を贈る志に擬え奉つて、其の碎身粉骨を、卒塔婆の基に藏め奉つて、親たり高祖日蓮大聖人様の御手に撰取誘引を願わんと、一門の弟子檀那、遠くは満洲、樺太より、九州、四国、関西、関東、さては北海道、東北等より集いに集いし人々、凡そ二百余名、読経、唱題、礼拝、焼香して、卒塔婆の除幕、開眼の法要をつとめ奉つて、一つには日本の仏法、月氏へ還るべき瑞相に魁けして、西天印度三億四千万の奴隷生活の繫縛を絶ち、我が衆生無辺誓願度の一句子の法門を、王舎城耆闍崛山中に於いて修行せしめ給わんことを願つて、暫く祖国の日本、上行菩薩応生の霊地に暇を乞うべき日なりけれ。

本山の朝の勤行の法要、諸堂残り無く終れば、悲母の追薦の御為めに、釈迦堂に於いて一山の大衆、読経唱題して回向供養し給ひ、続いて祖師堂、御真骨堂の開扉拝観を許させ給ひぬ。二百の大衆廻廊に連なり、同音の法鼓金山に響きぬ。悲母の追孝、西天の開教、二つながら高祖大聖人様まのあたり、允るさせ給ひし心地をする。

午前八時半、大衆は玄題旗を先頭に、木の卒塔婆を捧げて祖師堂の側より、羊腸たる岨道五十丁を、奥の院思親閣へと辿りつつ、鼓を撃つて御題目を唱え奉つりぬ。秋とはいえず日猶お浅く、樹陰なれども坂峻しく、汗流れ息喘ぎぬ。されど皆其の苦しみを打ち忘れて、只管ら歡喜の情に先きを争うて登りぬ。